

Journal
of **E**ducation
Inclusive

Printed 2016.0830
ISSN 2189-9185

Published by Asian Society of Human Services



August 2016
VOL. **1**

ORIGINAL ARTICLE

Special Needs Education Assessment Tool 10 (SNEAT10) の信頼性の検証 —スクリーニングツールとしての機能検証—

The Verification of the Reliability of the SNEAT10; The Study of Screening Scale for Inclusive Needs Child

小原 愛子¹⁾ (Aiko KOHARA), 太田 麻美子²⁾ (Mamiko OTA),
安藤 霧子¹⁾ (Kiriko ANDO)

- 1) 琉球大学教育学部
(Faculty of Education, University of the Ryukyus)
- 2) 琉球大学大学院教育学研究科
(Graduate School of Education, University of the Ryukyus)

<Key-words>

IN-Child, 信頼性, スクリーニング, SNEAT10
(IN-Child, Reliability, Screening, SNEAT10)

colora420@gmail.com (小原 愛子)

Journal of Inclusive Education, 2016, 1:67-73. © 2016 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

研究背景: 近年、通常学級において特別支援を必要とする児童生徒数が上昇している。そのような児童生徒は IN-Child (Inclusive Needs Child ; 包括的支援を必要とする子) と呼ばれている。しかし、IN-Child の抽出は、担任の主観的判断によって行われておりそれらを科学的に抽出するスクリーニングツールはこれまでなかった。**目的:** 本研究では、Special Needs Education Assessment Tool 10 (SNEAT10) が IN-Child のスクリーニング尺度としての機能検証を行うために、信頼性を検証することを目的とする。**方法:** 2016年2月～3月にかけて沖縄県内の小学校1校の1年生～5年生の526人を対象に、各学級担任17名がSNEAT10に記入を行いデータ収集した。信頼性検証には、内的整合性法のCronbach α 値を使用した。**結果:** 各領域で0.86～0.92、全項目で $\alpha=0.96$ と高い信頼性となり、抽出されたIN-Childも総合点数では6.30%と全国データと同様の結果となった。**結論:** SNEAT10の信頼性は高く、IN-Child抽出のためのスクリーニング尺度として使用できる可能性が明らかとなった。

Received
2016/8/3

Revised
2016/8/16

Accepted
2016/8/20

Published
2016/8/30

I. 問題と目的

文部科学省（2012）の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」（以下、「調査」とする。）においては推定値 6.5%の児童生徒が通常学校において支援ニーズを抱えていることが明らかになっている。通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、学校現場では、しばしば「気になる子」「気がかりな子」として呼ばれている。しかし、それらの用語の定義があいまいであることや、差別的な意味を含んでいることより、韓・太田・權（2016）は、現場で気になる子と表現されていた子どもを IN-Child (Inclusive Needs Child: 包括的支援を必要とする子) とし、「発達の遅れ、知的な遅れ又はそれらによらない身体面、情緒面のニーズ、家庭環境などを要因として、専門家を含めたチームによる包括的教育を必要とする子」と定義した。本研究においても、気になる子、気がかりな子は、「IN-Child」と使用することとする。

前述の文部科学省（2012）の調査で使用された質問紙は、発達障害の特徴が記述されたチェックリストとなっている。しかし、調査の標本対象となった児童生徒が少なく、チェックリストの信頼性・妥当性が検証されていない。このことにより、あくまで推定値と発表され、実際には IN-Child が学校内にいるにもかかわらず、十分な支援が行われていないことが課題として挙げられている。これらのことから、教員が IN-Child を認識するためのツール、すなわち IN-Child の抽出基準を設定するスクリーニングのためのツールが必要であり、それによる教育的支援及びその効果検証が必要であると考えられる。山口・松寄・柴田ら(2013)は、困難を抱える子どもたちの「気づき」を高める一つのツールとして、スクリーニング尺度があるが、子どもたちの抱える様々な困難に関して、包括的に、かつ手軽に、現場の教員が活用できるものは少ないことを示した。さらに、科学的に開発されたスクリーニング尺度は、いまだ開発されていないことが現状である。また、安藤（2016）は、学習に対する不全感から生じるストレスが二次的障害として行動面の問題に現れる可能性があるとし、できるだけ早期に個々の児童生徒に合った指導・支援を開始すべきであると述べた。これらのことから、現場では、教員が手軽に活用でき、かつ早期発見・早期支援するためのスクリーニング尺度が必要であるといえる。

日本の教育分野においては、学習評価や実践評価といった教育成果の評価の改善が課題とされてきた（中央教育審議会, 2011）。特別支援教育の現場で手軽に使用できる尺度として、QOL の観点を取り入れた特別支援教育評価尺度（Special Needs Education Assessment Tool; SNEAT）が開発され、信頼性・妥当性が検証されている（韓・小原・上月, 2014; Kohara et al., 2015）。SNEAT は、3 領域 11 項目で構成されており、主に特別支援学校で行われる教育活動の教育成果評価を測定対象としている。そのため、SNEAT を通常学校で使用した場合、通常学校に在籍するほとんどの児童生徒は高い点数をとること、特別支援教育を必要とする IN-Child は低い点数をとることが予想された。そこで、既存の SNEAT の項目の中から、通常学校の教育成果評価に必要な項目である 10 項目を抽出した SNEAT10 を開発した。SNEAT10 は、体の健康、心の健康、社会生活機能の 3 領域 10 項目で構成されているため、手軽に活用できることが予想される。また、SNEAT10 は、点数の低い子どもすなわち IN-Child 該当児を抽出するためのスクリーニングツールとしての機能、教育成果を評価するための機能の 2 つの機能で使用することが可能であると考えられる。

現在、SNEAT10 は科学的手法を用いて信頼性・妥当性が検証されていない。そこで、本研究では、IN-Child のスクリーニングツールとしての SNEAT10 の信頼性を検証すること目的とする。

II. 方法

1. 対象と手続き

本研究は、沖縄県内の小学校 1 校を対象とし、SNEAT10 を実施する学級担任 17 名及び、1 年生～5 年生の児童 526 名を対象とした悉皆調査である。SNEAT10 の実施にあたっては、学校長の同意のもと全教職員に対する説明会を実施し、研究の目的や方法を説明及び同意を得た。2016 年 2 月～3 月に、担任教員が授業中の子どもの様子を観察し SNEAT10 の評価を実施した

2. 質問紙

SNEAT10 は、体の健康、心の健康、社会生活機能の 3 領域 10 項目から構成されており、これら 10 項目は、児童生徒の教育達成度に合わせ授業担当教員が評価するものである。それぞれの項目について、評価者は、1=「ほとんどない」、2=「少しだけ」、3=「多少は」、4=「かなり」、5=「非常に」で最も適切な数字に○を付けるようにした。

また、学級担任教員の基本属性に関するフェイスシート及び子どもの基本属性に関するフェイスシートを添付した。学級担任教員の基本属性に関しては、年齢、性別、通算教職経験年数、特別支援学校の教職経験年数、特別支援教育教諭免許の有無について記入するようにした。児童生徒の基本属性に関しては、学年、クラス、番号、性別について記入するようにした。

3. 統計分析

信頼性の検証には、内的整合性法の Cronbach's α 値を使用した。 α 値は 0.7 以上あれば信頼性は高いと判断される (Cronbach, 1951)。

スクリーニングのための計算式には、知能検査等でも使用される (平均点数) - (2×標準偏差) を使用した。それらの計算式を用いることで、総合点数及び各領域のカットオフ値の算出を行う。カットオフ値以下の児童生徒を IN-Child とする。抽出された IN-Child の特徴分析を行うために、IN-Child と IN-Child 以外の児童生徒の点数比較を行う。これらの分析は、t 検定及び一要因分散分析 (One-way ANOVA) を用い分析した。統計解析には SPSS ver.23.0 を使用した。

4. 倫理的配慮

学校長、副校長、教頭、特別支援教育コーディネーターの同意を得たあと、学級担任教員の同意を得て研究実施を行った。さらに、匿名化し個人は特定されないこと、参加の有無による不利益はないことなどを文書で説明し、紙面で同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の基本属性

SNEAT10 を実施した学級担任は 17 名であったが、児童生徒のデータは 526 件中、欠損値を除く 524 件が対象となった。学級担任及び児童生徒の基本属性に関して、表 1 に示す。

学級担任の基本属性を見ると、性別は男女ともに同程度の割合であった。通算教職平均経験年数は 17.2 年であったが、特別支援教育平均経験年数は、0.025 年となっており、ほとんどの教員が特別支援教育に携わった経験がないことが伺える。また、特別支援学校教諭免許状保有者も 17.6 パーセントと低い値となっていた。児童生徒の基本属性をみると、各学年の分布は約 20%程度とほぼ同程度の割合となっていた。また、性別に関しても男女比が同程度であった。

表 1 学級担任教員及び児童の基本属性

学級担任教員 (n=17)		M±SD, n(%)
性別	男	9 (52.9)
	女	7 (41.2)
	不明	1 (5.9)
年齢(年)		40.9±5.4
通算教職平均経験年数(年)		17.2±5.7
特別支援教育平均経験年数(年)		0.025±0.075
特別支援学校教諭免許状保有	有	3 (17.6)
	無	12 (70.6)
	不明	2 (11.8)
児童生徒 (n=524)		n (%)
学年	1 年生	104 (19.8)
	2 年生	105 (20.0)
	3 年生	105 (20.0)
	4 年生	102 (19.5)
	5 年生	108 (20.6)
性別	男	262 (50.0)
	女	262 (50.0)

2. 信頼性の検証

内的整合性法を用いて算出した Cronbach's α 値は、体の健康領域で $\alpha=0.86$ 、心の健康領域で $\alpha=0.92$ 、社会生活機能領域で $\alpha=0.91$ 、全項目で $\alpha=0.96$ と高い値となり、SNEAT10 の高い信頼性が確認された。

表 2 SNEAT10 の項目の平均点数及び信頼性係数 (n=524)

Constructs	M	SD	Cronbach's α if item deleted	Cronbach's α
体の健康				0.86
Q1	4.80	0.54	0.89	
Q2	4.66	0.75	0.78	
Q3	4.73	0.70	0.76	
心の健康				0.92
Q4	4.72	0.62	0.91	
Q5	4.53	0.79	0.88	
Q6	4.62	0.73	0.88	
Q7	4.69	0.69	0.89	
社会生活機能				0.91
Q8	4.70	0.68	0.86	
Q9	4.68	0.68	0.81	
Q10	4.60	0.79	0.93	
All Items				0.96

Q1-Q10, (1=minimum, 5=maximum) $\alpha > .700$

3. カットオフ値の決定

スクリーニングに用いる計算式を用い、総合点数及び各領域のカットオフ値を算出した(表3)。該当児童生徒数は、総合点数で33名(6.30%)、体の健康で42名(8.02%)、心の健康で31名(5.92%)、社会生活機能で39名となったが、重複する児童生徒を考慮すると全体で58名(10.6%)となった。総合点数のカットオフ値は69.52点で、各領域のカットオフ値は20.05~26.96点となった。

表 3 カットオフ値及び該当児童生徒数

	該当人数 n(%)	M	SD	2SD	カット オフ値
総合点数	33 (6.30)	93.45	11.97	23.93	69.52
体の健康点数	42 (8.02)	28.38	3.59	7.18	21.20
心の健康点数	31 (5.92)	37.10	5.07	10.14	26.96
社会生活機能点数	39 (7.44)	27.97	3.96	7.92	20.05

各領域の該当人数は、重複する児童を含む。

IV. 考察

本研究は、通常学校において包括的支援を必要とする児童生徒（IN-Child）に対する教育成果評価尺度（SNEAT10）のスクリーニングツールとしての機能検証を行うために、SNEAT10の信頼性を検証した。2002年に文部科学省が行った実態調査では、発達障害の可能性がある児童生徒は、通常学級に6.3%いるとされていたものの、2012年では6.5%となっており、通常学校においてIN-Childは増加している。しかし、上述してきたように、IN-Childを抽出するために開発された科学的なスクリーニング尺度はこれまでなかった。また、学校教育現場では、尺度がないことでIN-Childを早期発見し早期の支援につなげることが困難という課題があった。本研究では、それらの課題を解決するためにSNEAT10のスクリーニング尺度としての機能検証を行う点で、社会的意義があると考えられる。

データ分析の結果、Cronbach's α 値は各領域で0.86~0.92、全項目で $\alpha=0.96$ と高い値とSNEAT10の高い信頼性が確認され、スクリーニングツールとして使用できる可能性が示唆された。また、抽出されたIN-Childは、総合点数で6.30%、体の健康で8.02%、心の健康で5.92%、社会生活機能で7.44%となった。特に、総合点数をみると6.30%であり、これは文部科学省（2012）の「調査」結果である6.5%と類似した結果となった。このことから、SNEAT10をIN-Child抽出のスクリーニング尺度として使用する可能性が示唆された。今後は、IN-Childのデータのみでさらに詳細の分析を行うことで、IN-Childの特徴傾向を明らかにすることが必要である。

SNEAT10は、高い信頼性が得られたことや抽出されたIN-Childが全国調査とも同様の結果となったことから、IN-Childのスクリーニングツールとして使用できる可能性があることが明らかとなった。しかし、本研究では、妥当性検証はされていないため、今後は、SNEAT10の構成概念妥当性の検証が必要である。

付記

本研究は、琉球大学の戦略的研究推進経費平成28年度 若手・女性・外国人研究者支援研究費「通常学校における特別支援教育を必要とする児童生徒に対する教育成果評価尺度（SNEAT10）の開発と教育成果評価モデルの構築」の助成を受けて実施された。

文献

- 1) Aiko Kohara, Changwan Han, Haejin Kwon, Masahiro Kohzuki(2015) Validity of the Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT), a Newly Developed Scale for Children with Disabilities. The Tohoku Journal of Experimental Medicine, 237(3), 241-248.
- 2) 安藤壽子(2016) 小学校低学年における読み書き困難児のスクリーニング: ディスレクシア簡易スクリーニング検査(ELC)を用いて. お茶の水女子大学人文科学研究,12, 117-130.
- 3) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(2011) 児童生徒の学習評価の在り方について(報告).

- 4) 韓昌完・小原愛子・上月正博(2014) 特別支援教育成果評価尺度(SNEAT)の開発. *Asian Journal of Human Services*, 7, 125-134.
- 5) 韓昌完・太田麻美子・權偕珍(2016) 通常学級に在籍する IN-Child(Inclusive Needs Child: 包括的教育を必要とする子)Record の開発. *Total Rehabilitation Research*, 3, 84-99.
- 6) 文部科学省(2002) 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全国実態調査.
- 7) 文部科学省(2012) 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」.
- 8) 山口豊一・松寄くみ子・柴田玲子・根本芳子・磯川かなえ・佐々木円ら(2013) 就学前の「気になる子ども」支援のための包括的スクリーニング尺度作成の試み: 日本における Kiddy-KINDLR Questionnaire 「幼児版 QOL 尺度親用」を用いて. 跡見学園女子大学文学部紀要, 48, A173-A183.

- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Atsushi TANAKA	University of the Ryukyus (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA
University of the Ryukyus (Japan)

Aoko CHINA
National Institute of Vocational Rehabilitation
(Japan)

Eonji KIM
Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)

Haejin KWON
Ritsumeikan University (Japan)

Hideyuki OKUZUMI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Iwao KOBAYASHI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Kazuhito NOGUCHI
Tohoku University (Japan)

Keita SUZUKI
Kochi University (Japan)

Kenji WATANABE
Kio University (Japan)

Kohei MORI
Kanda-Higashi Clinic, MPS Center (Japan)

Liting CHEN
Sophia School of Social Welfare (Japan)

Mika KATAOKA
Kagoshima University (Japan)

Mikio HIRANO
Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)

Nagako KASHIKI
Ehime University (Japan)

Shogo HIRATA
Ibaraki Christian University (Japan)

Takahito MASUDA
Hirosaki University (Japan)

Takashi NAKAMURA
University of Teacher Education Fukuoka (Japan)

Takeshi YASHIMA
Joetsu University of Education (Japan)

Tomio HOSOBUCHI
Saitama University (Japan)

Toru HOSOKAWA
Tohoku University (Japan)

Toshihiko KIKUCHI
Mie University (Japan)

Yoshifumi IKEDA
Joetsu University of Education (Japan)

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Mamiko OTA	University of the Ryukyus (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Journal of Inclusive Education

VOL.1 August 2016

© 2016 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI • Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education
VOL.1 August 2016
CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

- The Measurement of Educational Assessment and Psychology, Physiology and Pathology
for Children with Physical Disability, Health ImpairmentHaejin KWON, et al. 1
- Effects of Weekday Café Program in Special Needs School;
Using by Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT)..... Yoshimi CHINEN, et al. 11
- Redefinition and Construct of Diversity Education..... Changwan HAN, et al. 19
- Remembering the Past Autobiographical Memories and
Imaging the Future in an Adult with Amnesic Syndrome;
The Role of the Involuntary MemoryMikio HIRANO, et al. 28
- Study for Construction of the Individual Education Support Model:
Based on IN-Child Record Mamiko OTA, et al. 35
- The Influence of the Degree of Others/Self-understanding of
the Social Interaction in Children with ASD Toru SUZUKI, et al. 48
- Study on the Expectation of the Student Volunteers to Assist in
the Leisure and Learning for Hospitalized Children Sachiyo YAMASHITA, et al. 54
- The Verification of the Reliability of the SNEAT10;
The Study of Screening Scale for Inclusive Needs ChildAiko KOHARA, et al. 67
- Social Psychological Study for Motivations of Supports for
Developmental Disorders by Members in WorkplacesHiroataka KUWAKI, et al. 74
- Description of Disability in the Sub-textbook on Morals for
Elementary School Students Atsushi TANAKA, et al. 85
- The Discrepancy in Members' Participation Purpose in the Self-help Group of
Person with Disabilities and His/Her Family that Continues for Many Years:
A Case of the Group for Down's Syndrome Takahito MASUDA, et al. 92
- Current Situations and Issues of
the Education for Disability Understanding in Higher Education Haejin KWON, et al. 104
- Performance Analysis of Diversity Management using the Balanced Scorecard:
Case Study of Japanese Companies Employing Disabled and the ElderlyMoonjung KIM 114

REVIEW ARTICLES

- Special Needs Education in School Education Act and Services and Supports for
Persons with Disabilities Act Ryotaro SAITO 124
- Executive Function and Brain Pathology in People with
Intellectual and Developmental Disabilities Yoshifumi IKEDA 132
- Research Trends on Educational Support and Psychological Characteristics of
the Children with Physical Disabilities Kohei MORI 140
- Special Needs Education in The Elementary School Government Guidelines for
Teaching and Nursery Childcare Indicator..... Ryotaro SAITO 146
- Basic Study about Development of the Education for Disability Understanding Index;
Based on the Inclusive Education.....Haena KIM, et al. 155
- Current Situation and Issues Related to Organization of the Education Curriculum and
Devising of Educational Treatment of Children with Health Impairments..... Kohei MORI 164

PRACTICE REPORT

- A Report of the Project of Establishment of Educational Security Center for
the Long-term Hospitalized Children in Ehime Prefecture..... Kosuke NAKANO, et al. 170

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan